

2021年11月14日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

イザヤ書 9 : 5~6

ルカによる福音書 19 : 11~27

「王を待つ僕」

<ムナのたとえ>

今日のところは、小見出しに『ムナ』のたとえ」とあります。ムナというのは、お金の単位ですが、これはイエスさまがお話になったたとえです。簡単に言うと…

ある人が、王の位を受けて帰るために、遠くに旅立つことになりました。遠くに、ということ、長い時間不在になる、ということです。

その間にこの主人は、自分の十人の僕に、十ムナの金を渡しました。これは、一人一ムナが与えられた、と考えて良いでしょう。そして、「わたしが帰ってくるまで、これで商売をなさい」と命じたのです。

やがて主人が帰ってくると、その報告をさせました。十人全員の報告はされていません。語られているのは三人だけです。まず、一ムナから十ムナもうけた者。それから、一ムナから五ムナもうけた者がいました。しかし、三人目の者は、その一ムナを布に包んでしまっておいた。それは、主人が恐ろしい人だからだ、と言うのです。

するとこの主人は、せめて銀行に預けていたら利子でも付いたのに、と言って、この僕から一ムナを取り上げ、十ムナもうけた者に与えた。そういうたとえです。

このたとえを聞いて、マタイ福音書を呼んだことのある方なら、『タラントンのたとえ』とよく似ている、と思われたかも知れません。タラントンのたとえは、マタイ福音書の 25章 14節以下に語られています。こちらも簡単に言うと…

ある主人が旅行に出かける時、財産を僕に預けていきます。先ほどのムナは渡された、与えられましたが、タラントンは預けただけです。商売をなさいとも命じられていません。

そのタラントンは、それぞれの僕の力に応じて、違う金額が預けられました。ある者は五タラントン。ある者は二タラントン。ある者は一タラントンです。

ここでは、五タラントン預かった者は、それで商売をしてほかに五タラントンもうけた。二タラントン預かった者も、ほかに二タラントンもうけた。でも、一タラントン預かった者は、主人が恐ろしいからと言って、それを、穴を掘って地中に埋めて隠しておいた、ということです。

主人は、五タラントンもうけた者、二タラントンもうけた者のことを喜び、もっと多くのものを管理させよう、と言いました。しかし、一タラントンを埋めておいた者には、それを取り上げて十タラントン持っている者に与え、しかも外の暗闇に追い出してしまうのです。

タラントンは、このたとえにおいては、それぞれに神さまから与えられた才能や能力などの、賜物のことを意味しています。人によって、それぞれ与えられている賜物には違いがあ

り、出来ることにも差があります。でも、神さまはそれを、それぞれが与えられた分で、精一杯使い、積極的に活かすことを望んでおられるのです。

このように、二つのたとえはとても似ているのですが、やはり多くの違いもあります。その違いに気をつけながら、あらためて、「ムナ」のたとえで、イエスさまが何を教えておられるのか、耳を傾けたいと思います。

#### <遠くの国へ旅立つ主人>

まず最初に、ムナのたとえに出て来る、王の位を受けるために遠い国に旅立つ主人は、イエスさまのことです。イエスさまは、ご自分が王として神の国を完成なさるのは、遠い国に旅立って王の位を受け、そして帰ってきてからだ、ということ、まず教えておられます。

なぜ、そのようなことを言われたか。それは、11節に理由が語られています。

「人々がこれらのことに聞き入っているとき、イエスは更に一つのたとえを話された。エルサレムに近づいておられ、それに、人々が神の国はすぐにも現れるものと思っていたからである。」

エルサレムに向かっていたイエスさまは、そのすぐ手前のエリコの町で、救いを求めた盲人の目を開かれました。また、木の上に上ってまでイエスさまを見たいと願った徴税人ザアカイに声をかけ、それにお応えした彼に、救いを宣言されました。

人々が聞き入っていたこれらのこととは、この直前の、イエスさまと徴税人ザアカイとのやりとりです。9～10節「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」

このとき人々は、イエスさまが旧約聖書に語られた救い主、メシアではないかと考えていました。確かにその通りです。でも人々は、イエスさまが苦しみと死をもって人々の罪を贖うメシアである、ということは理解していません。人々が望むメシアは、力強く立派な王様であり、ローマ帝国など異教の国々の支配を打ち破って、地上のイスラエル王国を復興してくれるメシアでした。

そんな中、このメシアかも知れないイエスさまが、エルサレムに入られる。エルサレムは大切な神殿がある、ユダヤ人たちの中心地です。そこにイエスさまが入られることで、人々は、このイエスさまが王として即位し、「神の国」、つまり神のご支配が、たちまち見える形で現わされるのではないか。その時すぐにでも、滅びてしまった自分たちの国が復興されるのではないか。そんな期待を抱いていたのです。

しかし、イエスさまはそのような救い主ではありません。エルサレムへ向かわれるのは、これから人々の罪を贖うために、十字架に架かって死ぬためです。そして、復活し、天に上げられる。それがエルサレムで、イエスさまがメシアとして成し遂げられようとしておられ

ることなのです。

しかもまだ、そこで神の国が完成するのではありません。復活のイエスさまが天に上げられたら、その後、この地上においては、イエスさまのお姿をこの目で見る事が出来ない時代がやってきます。今のわたしたちの時代は、まさにその時にあたります。

十字架の死から復活し、天に上げられたイエスさまは、確かに罪を打ち破り、死に勝利して、神のご支配、神の国を、この世に打ち立てて下さいました。そして、信じるわたしたちは、確かに今すでに、この神の国に生かされています。

でも、イエスさまを、今この目で見たり、手で触れたり、直接会話したりすることは出来ません。天におられるイエスさまは、確かにわたしたちと共にいて下さいますが、それは、わたしたちに遣わされた聖霊のお働きを通して、共にいて下さるのです。ですから、神の国は、今はまだ目にはっきりと見えるものではありません。

それに、まだこの神のご支配を受け入れておらず、神の国に属する者となっていない人々が数多くいます。そういう意味では、神の国は、すでにイエスさまによって到来しているけれども、まだ完成はしていないのです。

神の国が完成するのは、天におられるイエスさまが、再び来られる日です。今日のムナのたとえで言えば、主人が王の位を受けて、遠い国から帰って来る日です。その日、すべての者が王なるイエスさまのお姿を認め、神のご支配がすべての者の目に明らかになり、神の国が完成するのです。

僕たち、つまりわたしたちは、その日を待たなければなりません。そして、待っている間に、みんな一ムナずつ渡されて、「これで商売をしなさい」と命じられているのです。

<ムナは何?>

では、この一人一人に等しく与えられている「一ムナ」は、一体何を表しているのでしょうか。それは、今日のたとえの最後の部分から読み解くことが出来ます。26 節には、こうありました。「主人は言った。『言っておくが、だれでも持っている人は、更に与えられるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられる。』」

これは、どこかで聞き覚えがないでしょうか。実は、ルカによる福音書 8 章 18 節に、同じような言葉がありました。「だから、どう聞くべきかに注意しなさい。持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っていると思うものまでも取り上げられる。」

これは、「種を蒔く人のたとえ」の続きにある、「ともし火のたとえ」の最後に語られていたことです。「どう聞くべきかに注意しなさい。」とありましたが、「どう聞くべきかに注意」しなければならない、と言われているのは、「神の言葉」なのです。

そう考えると、今日のところに戻りますと、ムナがたとえているのも、「神の言葉」であると考えられます。神の言葉。それは、イエスさまご自身のことであり、イエスさまの救い

であり、福音であり、神の国、ということも出来るでしょう。

神の言葉が与えられる。イエスさまの救いが与えられる。信仰が与えられる。これは、すべての人に、等しく、与えられるものなのです。

イエスさまは、十字架の死と、復活によって成し遂げられる「神の国」、神のご支配を告げておられます。それは、わたしたちの罪を赦し、復活を約束し、永遠の命を与えられる、命のご支配の知らせです。この神の言葉が、すべての者に与えられています。

わたしたちは、この神の言葉を受け入れ、信じることを求められています。神さまが与えて下さる救いを受け取り、信仰を与えられ、神さまに信頼して歩いていくのです。

そして、やがて来る、イエスさまが再び来られる日の、神の国の完成を待つのです。

今日のところでは、そのイエスさまの再臨、主人の帰りを待っている間に、与えられた一ムナで商売をなささい、と命じられていることが示されています。与えられた神の言葉を、信仰を、あなたのものとして、更に豊かになるようにしなさい。ますます信じる者となり、ますます恵みを与えられ、ますます世に広めていきなさい。

そのように歩みつつ待つことを、イエスさまは、わたしたちに求められておられるのです。

<僕たちの厳しい状況>

しかし、そのようにして一ムナを増やして待とうとするには、僕にとって厳しい環境であることが、今日のたとえに示されています。

14節にはこうありました。「しかし、国民は彼を憎んでいたので、後から使者を送り、『我々はこの人を王にいただきたくない』と言わせた。」主人が旅立った後、その国民は彼を憎んでいたので、王となることを拒否していた、というのです。

それは、僕にとっては、自分の主人を憎んで、退けようとしている人々の中で、商売をしなければならない、ということです。主人の命令に従って一ムナで商売をすることは、自分が主人の僕であるということを公にすること、とも言えるでしょう。

商売をすることで、主人を憎む人々から、「お前はまだあのどこかに行ってしまった主人の僕でいるのか。」「まだあの主人に従っているのか。」「まだ王となって帰ってくると信じているのか。」そんな風に揶揄されるかも知れません。主人を憎んでいる人々に、自分も同じように憎まれたり、嫌がらせをされるかも知れません。

僕たちは、そんな逆境の中で、一ムナで商売をしなければならなかったのです。

そのためには、まず僕たちに、主人への忠誠の思いがなければ、主人を心から慕う思いがなければ、周りの憎しみをはねのけていくことなど、出来なかったと思います。

そして、困難の中でも忍耐して、主人の命令に従って待ち続けるということ。それは、主人が必ず王となって帰ってくる、そして必ずこの国を支配なさると、固く信じ続けるということです。主人が僕に求めていたのは、まさにこのことなのでしょう。

一ムナを用いて十ムナもうけた僕、五ムナもうけた僕は、そのように、人々の憎しみの中でも、主人を大切に思って、お帰りを信じて、期待して、忍耐しつつ主人の言葉に従い、与えられた一ムナを存分に使いました。

彼らは、主人が信頼できる方であることを知っていたということです。そのためには、まず主人自身が、僕たちに対して誠実さを示さなければならなかったでしょう。

そして僕は、その主人が王となって帰って来られた日には、この憎しみを持つ人々をも支配して下さり、僕として歩んできた自分はきっとお褒めにあずかるだろ。そう希望を持って、主人を信じて、ご命令に従って働き、ずっと待っていたのです。

そして、主人は王となって帰ってきた時に、忠実なこの僕を、「良い僕だ。よくやった。」と大いに褒め、大いに喜び、自分の町の支配権までも、この忠実な僕たちに与えたのです。

#### <包まれたムナ>

しかし、20 節以下には、そうしなかった僕の報告が記されています。こうありました。「また、ほかの者が来て言った。『御主人様、これがあなたの一ムナです。布に包んでしまっておきました。あなたは預けないものも取り立て、蒔かないものも刈り取られる厳しい方なので、恐ろしかったのです。』」

マタイ福音書で、一タラントン預けられて使わなかった僕も、その一タラントンを、一応大事に、地中深く埋めて隠した、とありました。しかし、ここでは一ムナを布に包んでしまっておいただけです。地中に埋めるよりも、かなりぞんざいな扱いです。

そしてこの僕は、そうしたことを主人のせいにして、「あなたは預けないものも取り立て、蒔かないものも刈り取られる厳しい方なので、恐ろしかったのです。」

これはつまり、「あなたは、わたしから搾取するお方です。そんなあなたが恐ろしいので、一ムナには触らずに、包んでおいておきました」と言っているのです。

この僕には、主人に対する信頼も、親しみも、また期待もありません。それに、自分の不誠実さを主人のせいにして、主人に自分勝手な評価を下しています。そうして、命じられたことを無視しました。

主人は言います。「悪い僕だ。その言葉のゆえにお前を裁こう。」

主人は、一ムナから多くもうけられなかったことを裁くではありません。その言葉のゆえに裁くのです。おそらくこの主人は、一ムナで、一ムナしかもうけられなくても、僕が主人に従おうとしたのなら、それを認めて喜んだはずなのです。

ですから主人は、「ではなぜ、わたしの金を銀行に預けなかったのか。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きでそれを受け取れたのに。」と言いました。

つまり、主人を憎む人々の中で商売するのが僕にとってキツイということは、主人も十分わかっているのでしょう。そうであるならば、銀行に預けるだけ、という、負担の少ないや

り方もあったのです。工夫をして、何とか主人に喜ばれる方法を考えて、商売の他にも出来ることはあったのです。主人は、それでも良かった、と言われる。それでも認めて下さるお方なのです。

この僕は、主人を恐ろしい方だと言いました。でもこの僕は、主人の心を、主人がどのような方かを、本当に知ろうとしたことがあったでしょうか。

それに実は、本当に僕が恐れていたのは、主人よりも、周りの人々だったのではないのでしょうか。今は目の前にいない、遠くに旅立った主人より、今日の前にいる、主人を憎む人々をこそ、この僕は恐れていたのではないのでしょうか。彼にとっては、主人よりも、主人を憎む人々の方が、大きな存在だったのです。

そうして、主人の言葉に従うことをやめ、周りの人々から自分の身を自分で守ろうとした。主人の一ムナはなかったことにした。受け取らなかったことにした。主人の、自分を信じて待っててもらいたいという思いをないがしろにし、捨て去ったのです。

この、主人を重んじない心、主人の僕として生きることを拒む心こそが、この僕が裁きを受けることになった理由なのではないのでしょうか。

そして、主人を拒み、このように悪く言う僕は、主人を憎んでいた国民と、はたして何の違いがあるのでしょうか。

<どうやって待つか>

与えられた一ムナ。神の言葉。イエスさまの救い。福音。信仰。

これは、今は姿が見えない主人。つまり、帰ってこられるまでは天におられ、地上ではお姿が見えなくなったイエスさまが、わたしたちが信頼し続けて待っていることを期待しつつ、確かにこの手に与えて下さったものです。

わたしたちは、これを与えて下さった方が、わたしたちに対して誠実な方であること、愛し抜いて下さるお方であることを知らされています。

そして、この方に与えられたものによってこそ。御言葉に寄り頼み、イエスさまに信頼することによってこそ、希望を失わないで、忍耐して待つことが出来るのです。

一ムナは、みなに同じく与えられています。でも、それは受け止め方によって、さらに与えられるか、あるいは持っていたものまで失うか、その実りに大きな違いが出てきます。

神の言葉を、大切に受けとめ、心から依り頼み、さらに求めるなら、恵みはますます増し加えられ、神さまの愛をますます知らされることになるでしょう。

しかし、与えられた神の言葉をないがしろにするなら。与えられた信仰を、周りの目を気にして、包んでしまったり、手放したりしてしまうなら。そこに、恵みは増えようもありません。信仰を自ら手放すなら、神さまへの信頼は増しようもありません。そうすれば、すべてを失ってしまう。手許には何も残らない。それは、当然のことなのです。

そして、最後の 27 節には、主人が王になるのを望まなかった人々に、「ここに引き出し

て、わたしの目の前で打ち殺せ」と、厳しい裁きの言葉が述べられています。

しかし、つまり「イエスさまが王になるのを望まない」とは、イエスさまが、人間を支配している罪と死を打ち破って、まことの支配者となって下さることを望まない、ということです。イエスさまの命のご支配に生かされることを拒む、ということです。

そうであるならば、命の主であるお方から、人間が離れて行きつくところは、命の源である神から遠ざかったところは、当然、滅びしかない、ということなのです。

しかしまさに、これを語られたイエスさまは、これからエルサレムへ向かわれます。それは、すべての人々の罪を背負って、神に背いた者が受けるべきこの裁きを、ご自分の身にすべて引き受けて、十字架の死へと向かわれるためです。

悪い僕をも、救うために。イエスさまを憎む人々をも、神の国へと招くために。厳しく裁かれるべき人々をも、神の言葉に立ち帰らせるために。イエスさまは、メシアとしての救いの御業を、エルサレムで成し遂げて下さるのです。

今わたしたちも、この、救いの御業を成し遂げられたイエスさまが、再び来られる日を待っています。今、イエスさまは天におられ、この目には見えません。しかし、必ず帰ってこられます。その日には、まことの王として、神のご支配を完成させられます。わたしたちは、そのことを信じて、信仰を与えて下さった、救いを与えて下さったイエスさまを、心から待ち望みたいのです。

イエスさまは、信頼に足るお方です。僕のために、死んで下さる主人です。罪人のために、死んで下さる神の子です。この方他に、わたしたちの救い主はおられません。

ですからわたしたちは、イエスさまに心からの信頼と希望を置くのです。そして、この方が望んで下さったように、与えられたみ言葉を、信仰を、しっかりと受け止め、ますます豊かにされるように、求める者になりたいのです。

イエスさまを信じる者となったゆえに、逆境があるかも知れません。周りの人々の目が、恐ろしく感じることもあるかも知れません。

でも、神の言葉から遠ざかったり、イエスさまの救いを軽んじたり、救いの知らせを包んでどこかに置いてしまっただけではなりません。神の言葉にこそ、わたしたちの支えと、励ましがああり、忍耐してイエスさまに従うところにこそ、愛と希望が増し加えられていくのです。

それにイエスさまは、わたしたちが弱さや、不誠実さや、罪によって自ら招いた裁きによる滅びの死さえも、ご自分の十字架に担い、恵みの支配で覆って下さる、これ以上ない、憐れみ深い王なのです。

この愛に満ちた王の僕であるわたしたちは、終わりの日に、「良い僕だ。よくやった。」そうイエスさまに言っていただけることを心から楽しみに、イエスさまに喜ばれる歩みを求めていきたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちは、イエスさまが再び来られる日を待ち望んでいます。どうか、与えられた御言葉を、信仰を、救いの恵みを、深く受け止める者とならせて下さい。

そして、ますます恵みが増し加えられ、力を与えられ、福音が告げ広められ、イエスさまがわたしたちに命を与えて下さるほどに愛して下さったゆえに、イエスさまに忠実な僕として歩み続けることができますように。

そして、来たる日に、喜びと感謝に満ちあふれて、王なるイエスさまをお迎えし、「良い僕だ。よくやった」とのお言葉をいただく者となることができますように。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン